「対象と向き合う姿」から捉えた幼稚園カリキュラムの実践と検証

松岡　勝彦[*1]・大森　洋子[*2]・厚東佳奈枝[*2]・高田　和宜[*2]・福田　香織[*2]
髙橋　千恵[*2]・松村　淳子[*2]

A Practice and verification of the kindergarten curriculum
based on "how to be involved in the matter"

MATSUOKA Katsuhiko[*1], OHMORI Yoko[*2], KOTOH Kanae[*2], TAKATA Kazuyoshi[*2], FUKUDA Kaori[*2],
TAKAHASHI Chie[*2], MATSUMURA Atsuko[*2]
（Received August 3, 2020）

キーワード：幼稚園カリキュラム、事例研究、対象と向き合う姿

はじめに

附属幼稚園は、附属山口小学校・附属山口中学校とともに「やまぐち学園」として幼小中一貫教育に取り組んでおり、12年間を見通した一貫カリキュラムを編成しているところである。カリキュラム編成においては、教科におけるつながりを考えるとともに、「よりよい未来を創り出す人間を育てるという観点から、「対象と向き合う姿」「他者と向き合う姿」「自己と向き合う姿」を共通の視点として、12年間の子どもの育ちの姿を連続的に捉えようと考えている。

昨年度のプロジェクトでは、一貫教育実現のために共通の視点として見出したこの３つの「向き合う姿」について、３歳児から５歳児までの事例を検討することにより、各年齢のそれぞれの時期にどのような姿が見られるかと、そのような姿を育てるために有効な環境構成や援助は何かを探った。これにより、幼稚園教育における３つの姿の３年間の育ちの見通しをもつことができた。また、現行の幼稚園カリキュラムについて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連性と教科につながる内容を見出すことで、小学校へのつながりを再確認することができた。

今年度の本プロジェクトでは、カリキュラムの全体デザインを踏まえたうえで、今一度「対象と向き合う姿」に視点をあてて考えることとした。各年齢の子どもたちがどのように対象とかかわり、どのように育っていくのかをさらに詳しく具体的に捉え、そのためにどのような環境構成と保育者の援助が必要なのかを探っていきたい。また、それをもとに各年齢の姿、環境構成、援助のポイントに関する特徴をまとめ、一般化しながらカリキュラムや指導計画へと位置づけていくことを考えたい。

各年齢の「対象と向き合う姿」を捉え、その時期にふさわしい環境構成や援助を明らかにすることで、３，４，５歳のつながりや、５歳児から小学校へのつながりがより明確になると考えられる。また、編成したカリキュラムの妥当性についても検証できる。

１．研究の目的と方法

１－１　研究の目的

本研究の目的は、幼稚園における３歳児から５歳児までの子どもたちの「対象と向き合う姿」について、年齢ごとに具体的な姿を捉え、その際の境構成と保育者の援助について探ることで、本園カリキュラムを実践し、検証することである。

＊１ 山口大学教育学部特別支援教育　＊２ 山口大学教育学部附属幼稚園

１－２　研究の方法

研究の方法は次のとおりである。

① ３歳児、４歳児、５歳児のそれぞれについて、同じ対象（泡遊び・ごっこ遊び・正月遊びなど）にかかわる事例を記録し、「対象と向き合う姿」を捉え、そこでの環境構成や保育者の援助について考察する。

② 事例と考察をもとに、「対象に向き合う姿」を支えている環境構成のポイントと保育者の援助のポイントについて検討し、各年齢や時期に応じて整理する。

③ ①②をもとに得られた環境構成のポイントと保育者の援助について、カリキュラム（指導計画）に反映させて、本園カリキュラム（教育課程）との整合性を検討し、再編成する。

２．研究内容

２－１　事例検討

３際から５歳までの年齢ごとに、計15の事例について事例検討を実施し、事例から読み取れる「対象と向き合う姿」を捉えるとともに、その姿を支えている環境構成の工夫や保育者の援助について探った。事例検討を実施した時期と「対象」（遊び・活動）及び年齢は次の通りである。

・１学期「泡遊び」・・・５事例（３歳児１事例．４歳児２事例、５歳児２事例）
（表１、２、３）
・２学期「ごっこ遊び」・・・５事例（３歳児１事例．４歳児２事例、５歳児２事例）
・３学期「正月遊び」・・・５事例（３歳児１事例．４歳児２事例、５歳児２事例）

表１　３歳児泡遊び事例

6月3日(火)「泡ってクリームみたい、ふわふわでおいしそう！」

先週まで魚すくいを楽しんできたピチャピチャテーブルに、石鹸水を入れて準備をしていた。登園時に、保育者が手で泡立てていると、朝の支度が終わった子どもたちが次々と、興味津々にピチャピチャテーブルの側にやってくる。

保育者が泡を手の上にのせて「ふわふわだよー！」とやってみせると、近くにいたケンも両手を泡の中に入れて「ふわふわで気持ちいいね～。」と言い、しばらく手を入れて泡を触って楽しんでいる。すると、泡を手の上にのせて「クリームみたいですよ！」と保育者に嬉しそうに見せる。「本当だね。クリームみたいにふわふわ～とろとろ～だね。」と保育者が同じようにやって見せると、また泡の中に手を入れて泡をすくったりかき混ぜたりし始める。近くにあったままごと道具からお皿やカップを持ってきて、手ですくった泡をカップの中に入れていく。黙々と夢中になって泡をすくい、テーブルや洋服が泡だらけになっていくが、気にせず遊びを楽しんでいく。

テーブルの上にカップやお皿をたくさん並べたナナは、お皿にたっぷりと泡をのせて「お子様ランチでーす！お待たせしました！」と保育者に見せる。保育者が「ふわふわご飯だ！おいしそう。」とナナとのやり取りを楽しむと、「またつくってあげるね。」と新しいお皿にまた泡をたくさんのせていく。

考察

○泡を立てたり触ったりして楽しむ保育者の姿を見て、子どもたちは興味をもって遊びに加わっていた。保育者の楽しそうな姿を見ることが、遊びに興味をもつきっかけになっていたと分かった。

○室内履きでも行き来できるよう人工芝を敷いた。行き来しやすい空間になったことで、興味をもった時に遊びに入りやすくなったと思われる。

○ケンは、両手を泡の中に入れて、思う存分泡を触って感触を楽しんでいた。汚れることを気にせずに夢中になって遊んでいたことからも、泡の感触の心地よさを体いっぱいに感じていたのだろう。自分の手や体で感触を味わう姿をしっかりと認めていくことを大切にしたい。また、保育者が「ふわふわ」「とろとろ」と感触の楽しさを言葉で表現して伝えたり、心地よさを共感したりすることで、感触の楽しさをより味わえるようにした。

○泡遊びをダイナミックに楽しめ、友達がいる中でも自分のしたいことを存分に楽しめるような環境があることが大切だと感じた。「ピチャピチャテーブル」のような横長のテーブルだと、友達や保育者との距離が近くなり、相手の顔やしていることが見えやすくなる。また、たくさんの人が集まることができ、立って遊べる高さなので

泡を扱いやすい環境となっているのではないかと思われる。

○子どもたちは、次第に「ピチャピチャテーブル」の側にあるままごと道具を使うようになり、繰り返し出してはまた同じように遊んでいた。あるものを何でも使いたくなるこの時期だからこそ、遊びに使える道具が子どもの側にあることが大事で、繰り返し遊べるように数や量を多めに用意しておくことが必要だと考える。

○ケンは泡を触ってクリームをイメージしたり、ナナはお皿の上にのった泡を見て料理をイメージしたりと、一人一人違った泡へのイメージや遊び方があった。自分のしたいことで遊びたい時期だからこそ、自分のしたい遊びを十分に楽しめるように、同じ遊びの場でも一人一人の子どもに応じた援助が大切だと考える。それぞれのしたいことができるように材料をそろえたり、保育者がそれぞれの遊びの楽しさを共感し、受け止めたりすることを大切にしたい。

環境構成のポイント

◇やってみたいと思ったときに遊びに入りやすいような場（室内履きでも行き来できる人工芝など）を準備する。

◇ダイナミックに感触遊びを楽しめるように、子どもが立って遊べる高さや子どもがたくさんいても遊べるような大きさのある用具を使う。また、友達や保育者とのやり取りも楽しめるように、向かい合う相手との距離が近く、相手の顔やしていることが見えやすい用具を使う。

◇子どもが遊ぶ場の近くに遊びに使えるような道具を準備する。

◇繰り返し使えたり、一人一人したいことができたりするように、数や量を多めに準備する。

保育者の援助のポイント

◇遊びへの興味がもてるように、保育者が実際に遊びを楽しむ様子や遊び方を見せる。

◇子どもたちと一緒に感触を楽しみ、子どもたちが自分の手や体で泡の感触を味わう姿を認める。

◇泡の感触の楽しさや心地よさを感じる姿を受け止め、言葉にして伝えていく。

◇同じ遊びの場でも一人一人違う遊び方や遊びのイメージに寄り添い、それぞれの楽しさを共感しながら一緒に遊びを進めていく。

環境図

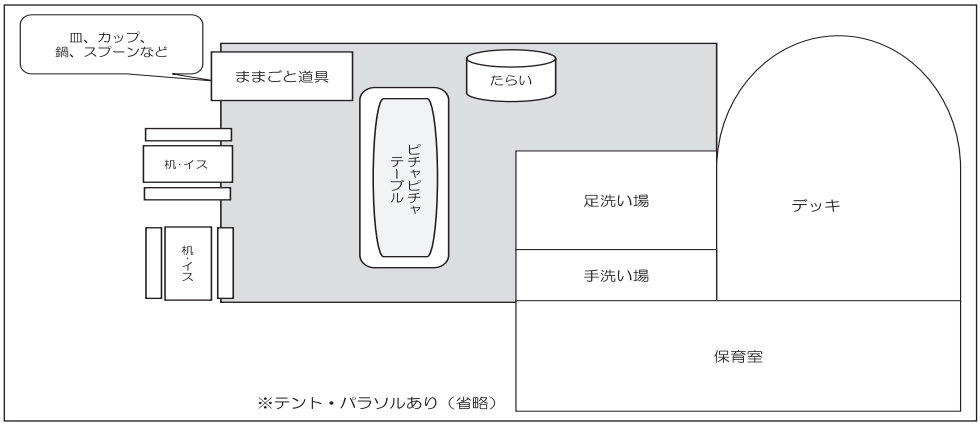


表２　４歳児泡遊び事例

6月18日（火）「何するの？おもしろそう！やってみたいな。」　子どもたちの遊びが一段落した頃、机を持ってきたり、その側に泡立て器やボウルなどを出したりして泡遊びの場を準備する。準備している保育者に、「先生、何するん？」「私もやってみたい。」とウタがやってくる。保育者が「何ができるかね。全部準備したら始めようね。」と声をかけ、削った石鹸を入れた容器を机の上に置いたり、スプーンを出したりなど、興味をもって近くに来た子どもたちと一緒に出す。準備が終わり、「ボウルを持ってきてね、石鹸をスプーンで入れるんよ。そして、水を入れてね、泡立て器で混ぜてみたらね･･･」と実際に泡立てて見せる。すると、ウタも「わたしもやってみる！」と言って保育者がしていることを真似てやってみる。それを見て、ユキコは「先生、私もやっていい？」と言って、自分でボウルや泡立て器を準備して始める。そこに、ユリやシンゴも来て、「先生、やってみたい。」と声をかけてくる。すると、「まず、ボウルを持ってきてね。」とウタが言う。「ここに石鹸があるじゃろう。それを入れるんよ。」と、ユリやシンゴの様子を見ながら話す。

6月26日（水）

泡遊びを楽しむ子どもたちが増えたため、風組２のテラスの前から、風組１の前に場を移す。いつもは泡遊び

の横を通り過ぎるだけだった風組２のトシヤが「ぼくもやる。」と言って、保育者の側に来る。「どうやってやるん？」と聞きつつも、「ボウルがいるんよね。」と言って、ボウルやジョウゴなどを持ってくる。また、ユキコが「石鹸の粉がなくなった。」と声をかけてきたので、保育者が削ろうとしたら、「ユキコがやる。」と言って、自分で石鹸を削り泡をつくり始める。それを見て、「私もする！」とウタやサエも始める。

考察

○子どもたちは、保育者や友達がしていることが気になり、「やってみたい。」「どうやってやるん？」と尋ねてきた。遊びの場を一緒に準備をしたことで遊ぶ場所や必要な用具の場所がわかり、遊びに入りやすかったのではないかと感じた。また、実際に泡をつくるところを見せながら始めたことで、手順を理解しやすく、子どもたちで遊びを進めていけるきっかけになったように思う。

○用具を種類別にかごに入れて並べて、子どもたちの手が届くところに置いたことで、子どもたちにとって遊びに必要な物が分かりやすく、そのことをきっかけに遊びに入りやすかったようである。また、子どもたちが机を囲んで遊べるように泡作りに必要な石鹸や水を机の中心に置いたことで、友達がしている様子を見ながら、泡のつくり方を真似したり、自分なりに泡立ててみたりしていた。

○ボウルや泡立て器など、今まで園で使って遊んだことがある用具や、家庭で使ったことがある用具を出したことで、自分達で遊びを進める姿や友達に使い方を知らせる姿も見られた。

○石鹸やおろし金など、初めて触れる素材や用具があると、子どもたちにとって魅力的だったようで、使ってみようとする姿が見られた。また、保育者や友達が使っている様子を見て、自分でもやってみたいという姿も見られた。

○泡遊びの場を数日出しておいたことで、最初は見ているだけだったトシヤが、友達の遊ぶ様子を見ながら泡遊びの場に来た。他にも、面白そうだなと思っていても、その時の遊びが楽しかったり、人が多くて入りにくかったりして、かかわるタイミングを伺っている子どもたちが、保育者を拠り所として、遊び始めたり、保育者を介しながら友達とかかわろうとしたりする姿が見られた。

○保育者が削っていた石鹸では足りなくなり、自分でも石鹸を削って、泡をつくりたいという思いが出てきた。その思いが叶うように、おろし金を出したり、固形石鹸を出したりして、遊びながら出てきた子どもたちの思いに沿って、用具や工程を追加していった。そうすることで、子どもたちが自分なりに考えたり、繰り返してみたりして遊びが続いていった。

環境構成のポイント

◇保育者や友達がしている遊びが見えるところに場を設定する。

◇子どもたちが興味関心をもって遊び始められるように、子どもたちと一緒に場をつくり遊びに必要な物を準備する。

◇必要な材料や用具を、取りやすいように並べて置いたり、遊びの場の近くに置いたりする。

◇興味関心をもったり、遊びを広げたりしていけるように、初めて触れる材料や用具も出していく。

◇子どもたちが自分のタイミングで遊びに入れるように、数日場を出しておく。

保育者の援助のポイント

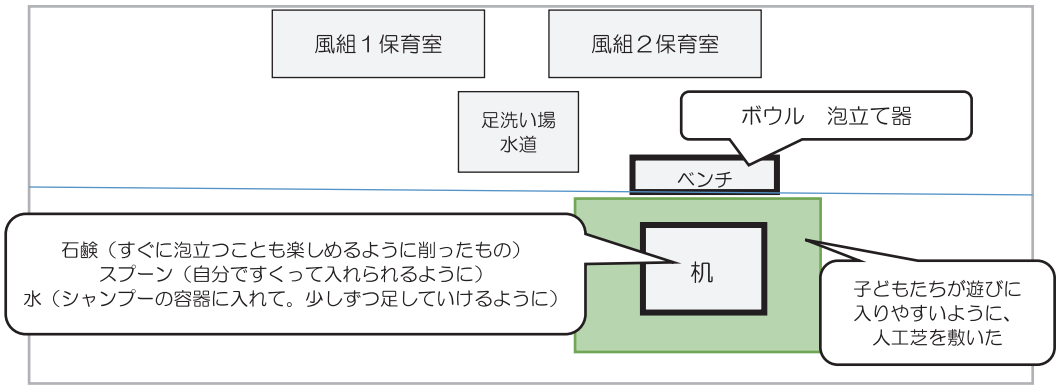
◇保育者や友達の姿を見て興味をもった子どもたちが、安心して遊び始められるように、側で一緒にやってみたり、入れる空間をつくったりする。

◇子どもたちが手順を理解した上で、自分たちで気付いたり面白いと思ったりしたことを試せるように、まずは泡立てるのに必要な物や、水を入れて泡立てる様子などを一緒にやってみせる。

◇子どもたちが自分の思いを自分で叶えていくことも大事にして、子どもたちの遊ぶ様子を見ながら、必要な用具を出したり、使い方を知らせたりしていく。

環境図

6月18日



6月26日

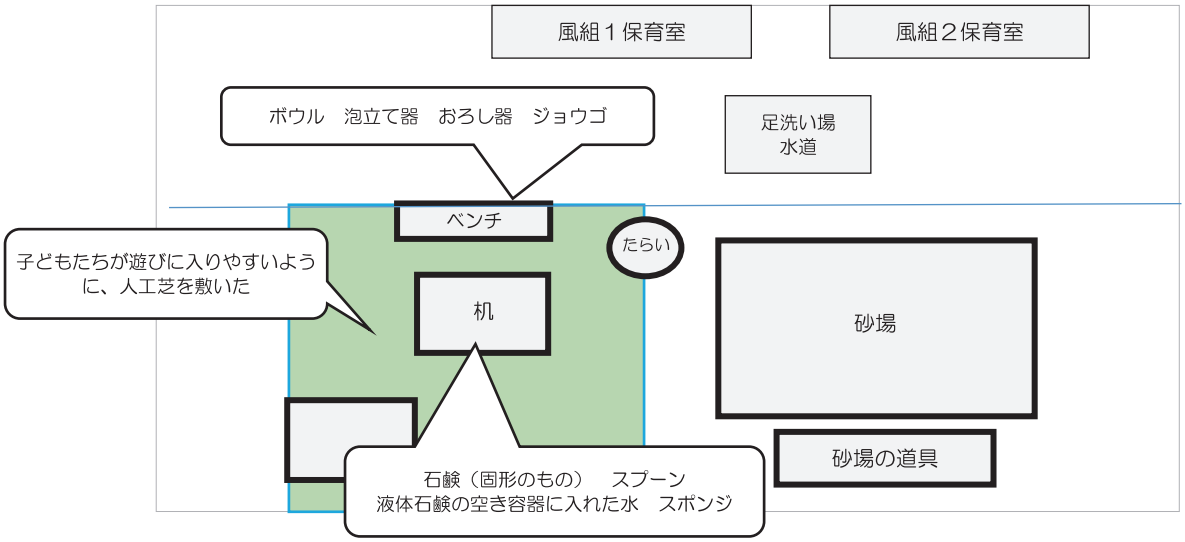


表３　５歳児泡遊び事例

6月24日（月）友達がつくったシャボン玉液を参考にして自分でつくる

子どもたちがシャボン玉液を自分でつくって遊べるように、石鹸とおろし金、ストロー、カップをそれぞれケースに入れテーブルに並べる。その横に机を囲んで8人程度が遊べるように場を用意する。年中の時に体験していることから自分達で石鹸を粉にし始める。削った石鹸をみんなで共有して使えるように「削ったらここに入れてね。」と子どもたちに声をかけ、テーブルの中央にボウルと小さいスプーンを置く。アキナは自分が削った石鹸の粉をボウルに移し、スプーンで石鹸の粉をカップに入れる。カップに半分程度水を注ぎストローで混ぜる。混ぜながらストローで吹くと小さいがシャボン玉になり「あ、できた。」と言う。「スプーンで何杯入れた？」と保育者が聞くと「1杯か2杯。」と答える。アキナは「もっと入れよう。」と言ってスプーンで石鹸を足し入れては混ぜ、ストローで吹いてはシャボン玉の出来具合いを試す。保育者は周りの子どもたちに「アキナちゃんみたいに少しずつ入れて試したらいいんよ。」と伝える。ユキオはカップいっぱいに水を入れ、それを見たリノが「水入れ過ぎ。」と言う。ユキオが「先生、（水）捨てた方がいい？」と聞く。保育者が「石鹸は何杯入れた？」と聞くと「2杯。」と答える。保育者は「混ぜにくいから水を少し減らしてから石鹸を足したら？」と言う。ユキオは水を少し減らし、石鹸を足しては「まだまだサラサラ。」と言いながら、満足な粘りが出るまで繰り返し混ぜ続ける。

考察

○子どもたちは年中組の時に石鹸を削って、泡立て器で水と混ぜ合わせて泡をつくったり、保育者が用意したシャボン玉液でシャボン玉を吹いたりした経験がある。石鹸とおろし金を用意すると、保育者が特に教えなくても自分達で石鹸を削っていく。年中組の時にした体験があることで見通しがもて、自分達で進めようとする意欲が感じられる。

○石鹸と水の割合を試しながらシャボン玉液づくりを楽しめるように、削った石鹸の粉を共有するボウルを出した。みんながそれぞれ削った石鹸の粉を一つのボウルに入れることにはあまり抵抗を示さなかった。それぞれがつくったものでもみんなで共有して使うことを受け入れられるようになっていると思われる。

○共有するボウルをテーブルの中央に置きそこから必要な量の石鹸の粉をスプーンでそれぞれのカップに入れる環境構成にしたが、それぞれが削った物を共有して使うことは受け入れられている。

○水と石鹸の粉の割合に目を向けられるように、スプーンを使って少しずつ石鹸の粉を入れることを促した。ユキオが水を入れ過ぎていることに気づいてリノが伝えていることから、友達がする姿を見て調整しようとすることが伺える。

環境構成のポイント

◇年中の時に使って楽しんだ道具を用意することで、自分達で遊びが進められるようにする。

◇それぞれが削った石鹸を共有して使えるように、テーブルの中央にボウルとスプーンを用意する。

◇大きなテーブルを囲うようにして遊びを進める場にし、お互いの様子や声に気づけるようにする。

保育者の援助のポイント

◇友達の気づいたことや工夫したところが他の子どもに伝わるように、保育者が声をかけたり、促したりしてつなげる。

6月26日（水）「なんでシャボン玉って全部丸くなるん？」

自分達でシャボン玉の液づくりをし始めて3日目。シャボン玉の大きさや形に目が向くようにいろいろな大きさのペットボトルをシャボン玉ができるように切って用意しておく。アイナ・リオ・マサシ・カイトは用意しておいたペットボトルでシャボン玉をつくる。カイトが角ばったペットボトル（写真①）にシャボン液をつけて吹くと少し大きなシャボン玉ができる。ゆっくり吹くと半円の膜が膨らんだり、吹くのを止めるとしぼんだりする。その様子を見ていたカイトが、「ふーってすると大きくなって、止めると小さくなるよ。」とアイナ・リオ・マサシに言う。リオは、シャボン玉ができているのを見て、「なんでここ四角なのに丸いシャボン玉ができるん？」とつぶやく。すると、アイナ・マサシ・カイトは「うーん。」とそれぞれの顔を見合う。

（写真①）

（写真②）

シャボン玉をつくっていると、リオが「四角とかハートのシャボン玉つくりたい。」と言う。保育者が「おー。いいね。面白そう！」というと、「そんなのできんのんじゃないん？」とマサシ。すると、アイナ・リオは「できるよ。」と言う。そして、アイナが保育室にあるカップ入れをかごごと持ってくる。いろいろな形のカップ（花型のプリンカップ・四角型の豆腐カップ）を取り出し、保育者に「これに穴を開けて？」と持ってくる。リオが穴の開いた四角型の豆腐カップにシャボン液をつけて吹くと、丸いシャボン玉ができる。「シャボン玉できたよ。でもやっぱり丸やん。」とリオ。「また丸になったん？」とアイナ。それを見たアイナは穴の開いたプリンカップで花型のシャボン玉をつくろうとするが、なかなかできない。

そこで、保育者が発砲スチロールをハート型に切る（写真②）と、リオが「先生、これ吹いてみたい。」と保育者の方に寄って来る。とリオが「見とってよ。」と周りの友達に言いながらシャボン液をつけて吹いてみようとする。アイナが「見ててあげる。」とリオの吹く様子をじっと見つめる。ゆっくり吹いても勢いよく吹いても半円の膜が膨らむ。その様子をアイナはじっと見つめる。そして、嬉しそうな顔でアイナが「やっぱりね～！これも丸になる。」とリオに伝える。するとリオも「ほんとじゃ。やっぱり。ね～！」と言ってアイナの顔を見て微笑む。

考察

○カイトは、シャボン玉をゆっくり吹いたり、吹くのをやめてみたりすることで、シャボン玉の膜の動きに興味をもっている。また、膜の動きと息の吹き方が関係していることに遊びながら気づいている。
保育者は、子どもたちが自ら感じとって見つけたことを見守ったり、子どもが感じたことに共感したりしていくことを大切にしていきたい。

○リオは、シャボン玉をいろいろな形にしてみたくなる。その様子を見たマサトは「できんのんじゃない？」と自分の思いをリオに伝える。子どもたちがどのようになるかを予想する姿が見られた。保育者は、子どもたち一人一人が予想していることをみんなの課題として共有できるようにしていった。

○シャボン玉とかかわる中で、シャボン玉の形に注目し、様々な道具に興味をもっていろいろな形ができるか何度も繰り返し試しながらやってみようとしている姿が見られる。また、何度もやってみることにより、シャボン玉はどの型でも丸になるということに遊びながら気づき、喜んでやってみようとしている姿が見られる。保育者は、子どもが遊びの中でできないことと分かっていることでも、子どもたちが不思議だと思う気持ちに寄り添い、おもしろそうなことを考えている子どもをみとり、受け止めていくことが大切であると考える。

○アイナのように友達のやってみようとする様子をじっと見ようとしたり、見たことをリオに伝えて２人の中で共有したりする姿がみられる。自分達の思いを伝え合い、相手の気持ちを考えながら遊ぼうとしているところを見守り、必要に応じて遊びに関わることを大切にしていきたい。

環境構成のポイント

◇子どもたちの興味・関心が広がっていくようにいろいろな大きさのペットボトルでシャボン玉をつくれるように用意する。

◇子ども自身が自分で考えたり試したりし、必要なものを選べるように、素材や用具の種類を多く用意する。

保育者の援助のポイント

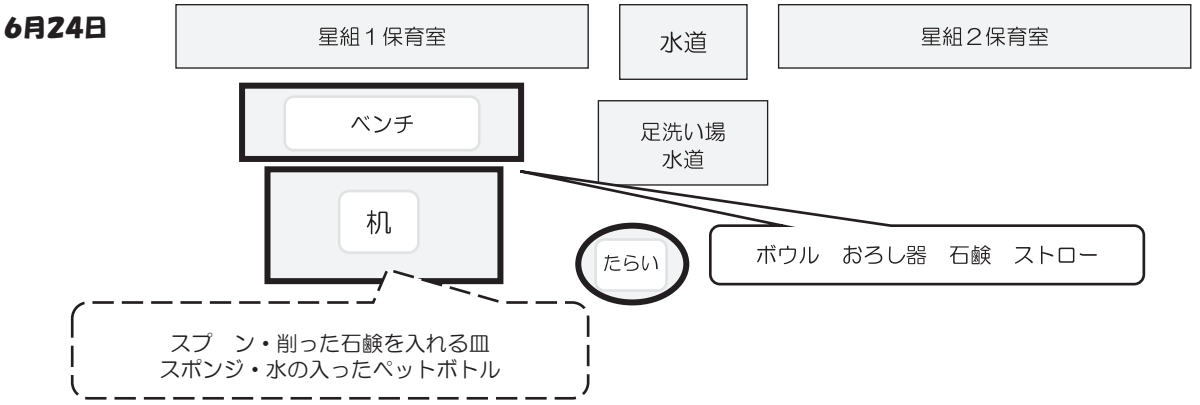
◇子どもたちが試したり繰り返したりする姿を大切にして、遊んでいる姿を見守りながら、一緒に試したり、認めたり、共感したりする。

◇子どもたちの個々の課題をみんなの共通課題にできるように共有したり、試してみてわかったことを共感したりする。

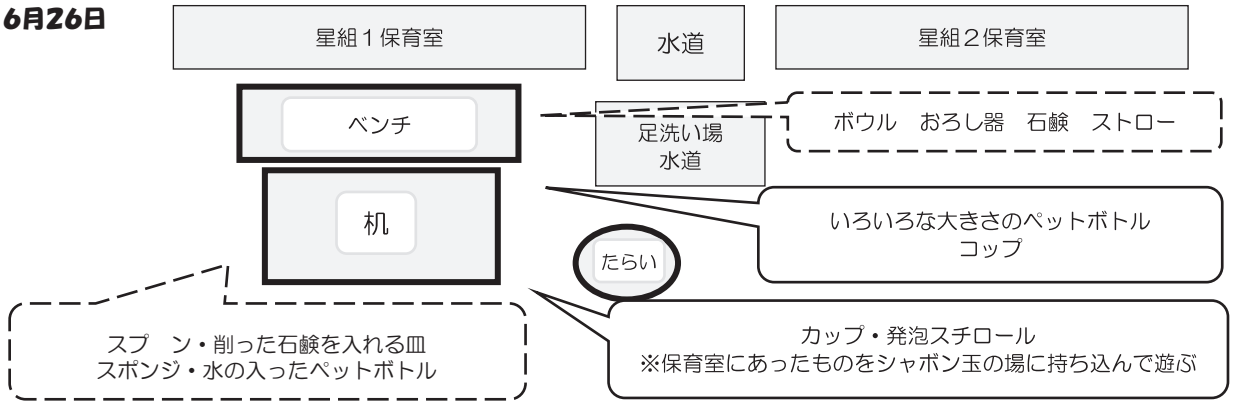
◇友達と思いを伝えながら一緒に遊ぶ過程を大切にし、思いを出し合ったりお互いに納得しながら進めたりする姿を認める。

環境図

6月24日



6月26日



２－２　事例検討をもとにそれぞれを遊びについて整理する

事例検討をもとに、泡遊び、ごっこ遊び、正月遊びのそれぞれの遊びについて、３、４、５歳ごとに環境構成のポイントや保育者の援助の特徴を整理した。

３歳児１学期の泡遊びから読み取れる「対象と向き合う姿」は、「近くにあるものを使って遊ぶ」「繰り返し使ったり遊んだりする」姿とし、その姿に対する有効な環境構成は、「遊びの場（子どもの側）に遊びに使える用具を準備する。」「材料や用具の量や数を多めに準備する。」とした。また、「ダイナミックに感触遊びを楽しむ」姿に対しては、環境構成のポイントとして、「立って自由に遊べる高さの道具を準備する。」、保育者の援助のポイントとして、「子どもたちが感触を味わう姿を認める。」「楽しさや心地よさを感じる姿を受け止める。」「楽しさを言葉にして伝える。」を取り上げた。

同じ泡遊びに関して、４歳児の同時期については、「対象と向き合う姿」として「いろいろな材料や用具を遊びに取り入れて使う」「遊びに必要な材料や用具を選んで使う」を取り出し、有効な環境構成としては、「遊びの場の近くにいろいろな用具を分類して準備する」「初めて触れる素材や用具は、目につくところに準備する」を取り上げた。

また、「保育者や友達の姿を見て興味関心をもって遊びに入る」姿に対しては、環境構成として、「子どもと一緒に遊びに使うものや場を準備する」「継続して場を出す」を取り上げ、保育者の援助のポイントとしては、「側で一緒にやってみる。」「後から来た子どもも遊びに入ることができる空間をつくる。」を抽出した。

５歳児の同時期の泡遊びでは、「対象と向き合う姿」として、「様々な材料や用具を遊びに取り入れながら、試したり考えたりする」「用具の使い方が分かり、自分達で遊びを進めようとする」姿を取り出し、環境構成のポイントとしては、「様々な種類の素材や材料、用具を準備する」と「年中の時など、以前使ったことのある用具も準備する」を、保育者の援助のポイントとしては、「一緒に試したり、分かったことを共感したりする」と「それぞれに感じたり考えたりする姿を認め、側で見守る」をまとめとして表した。
このようにして、それぞれの遊びにおける「環境構成と保育者の援助のポイント」について年齢ごとにまとめ、表にした。（表４、表５、表６）
これにより、発達による特性が分かりやすくなり、見通しを持つことが可能となった。

表４　７月～11月　泡遊びにおける環境構成と保育者の援助のポイント

□□□…子どもの姿　●…材料や用具に関して　●…場に関して　●…保育者の援助

３歳児	４歳児	５歳児
近くにあるものを使って遊ぶ **繰り返し使ったり遊んだりする** ●遊びの場（子どもの側）に遊びに使える用具を準備する。 ●材料や用具の量や数を多めに準備する。 **ダイナミックに感触遊びを楽しむ** ●立って自由に遊べる高さの道具を準備する。 ●子どもたちが感触を味わう姿を認める。 ●楽しさや心地よさを感じる姿を受け止める。 ●楽しさを言葉にして伝える。 **興味をもった時に遊びに入る** **保育者の姿を見て遊びに興味をもつ** ●遊びに入りやすいよう室内履きでも行き来できるような場にする。 ●一緒に遊びを楽しんだり、遊び方を見せたりする **自分のしたい遊びを楽しむ** **一人一人の遊びのイメージや楽しみ方がある** ●一人一人遊べる空間がとれるように、大きさのある用具を使う。 ●一人一人のイメージに寄り添う。 ●それぞれの楽しさに共感しながら、一緒に遊びを進める。 **保育者のしていることを真似る** **保育者とのやり取りを楽しむ** ●向かい合う相手との距離が近くなるように場をつくる。	**遊びに必要な材料や用具を選んで使う** **いろいろな材料や用具を遊びに取り入れて使う** ●遊びの場の近くにいろいろな用具を分類して準備する。 ●初めて触れる素材や用具は、目に付く所に準備する。 **保育者や友達の姿を見て興味関心をもって遊びに入る** ●●子どもと一緒に遊びに使うものや場を準備する。 ●継続して場を出す。 ●側で一緒にやってみる。 ●後から来た子どもも遊びに　入ることができる空間をつくる。 **自分のしたい遊びに合う場を見つけて楽しむ** ●つくる場とつくったもので遊ぶ場など遊び方に応じて場を分けたり、遊びに必要な場をつくったりする。 **自分の思いや考えをもってやってみようとする** ●子どもの思いや遊びに応じて、必要なものを準備したり一緒にやってみたりする。 **友達の遊びを見て、イメージを広げて遊ぶ** ●保育者や友達のしている遊びが見えるところに場をつくる。 ●子どもの思いに共感し、より楽しめるように声かけしたり、一緒に楽しんだりする。	**様々な材料や用具を遊びに取り入れながら、試したり考えたりする** **用具の使い方が分かり、自分達で遊びを進めようとする** ●様々な種類の素材や材料、用具を準備する。 ●年中の時など、以前使ったことのある用具も準備する。 ●一緒に試したり、分かったことを共感したりする。 ●それぞれに感じたり考えたりする姿を認め、側で見守る。 **自分の思いや考えをもって友達一緒に遊ぶ** ●それぞれの思いを共有できるように声をかけ、子どもたちが共通の目的をもって遊びを進められるように支える。 **友達とものを共有しながら遊ぶ** **友達と話し合ったり試行錯誤したりしながら、遊びを進めようとする** ●友達と使うものを共有できるようテーブルの中央に用具を準備する。 ●大きなテーブルを友達と囲えるように場をつくる。 ●友達の気づきや工夫が伝わるような声かけをする。 ●自分の思いを伝えたり納得したりできるように支え、思いを伝え合いながら遊びを進める姿を認める。

表５　７月～11月　ごっこ遊びにおける環境構成と保育者の援助のポイント

□□□…子どもの姿　●…材料や用具に関して　●…場に関して　●…保育者の援助

３歳児	４歳児	５歳児
漠然とした遊びのイメージをもつ ●●囲いや看板などのお店をイメージしやすい簡単な場やものを準備する。 ●子どもの思いやイメージを聞きながら、必要なもの一緒につくっていく。 **身近なもので簡単につくったり見立てたりして遊ぶ** ●子どもたちが使いやすい身近な素材や材料を準備する。 **それぞれがやりたい役になって遊ぶ** **見立てたものでなりきって遊ぶ** ●イメージしやすいものを、身近な材料で簡単につくったり見立てやすい道具を準備したりする。 ●一人一人の思いに寄り添って一緒に遊びを楽しむ。 **保育者を真似て遊びを楽しみ、遊びのイメージをもつ** ●遊びの中の役になりきってかかわったり、やり取りの仕方を示したりする。 **繰り返し遊んだり明日もできたりすることを楽しみにする** ●保育者が継続して場を準備する。	**遊びのイメージをもち、思いを形にしようとする** ●遊びのイメージがわいたり広がったりするような声かけをする。 ●一人一人のイメージや楽しみ方を認め、思いが実現するように手伝ったり一緒に遊んだりする。 **自分でイメージする場やものをつくろうとする** **遊びに必要なものを自分で選んで使おうとする** ●必要な用具や素材をいつも同じ場に準備しておく。 ●イメージに合わせて色々なものに見立てられるような道具を準備する。 ●カウンターフェンスや大型積木など、子どもでも動かせる重さや大きさのものを準備する。 ●遊びの目的に適切な用具や素材かを尋ねたり、一緒に考えたりする。 **友達の遊ぶ様子を見て、興味をもって遊びに入る** ●周りの友達からも見えるところに場をつくる。 ●一人一人のやってみようとする気持ちを見守ったり、声をかけて遊びに入るきっかけをつくったりする。 **それぞれの役になりきって友達と一緒に遊ぶ** ●●遊びのイメージがしやすい場やなりきれるものを準備する。	**自分が経験したこともとにイメージを広げる** ●今までにつくったり遊んだりしたことを思い出せるように伝えたり、相談にのったりする。 **自分なりに考えながら必要なものを選び、イメージ通りにつくろうとする** **遊びの中で必要なものや場を友達と一緒に考えたりつくったりする** ●イメージに合うような素材や材料を出したり、必要なものを選んで使えるように準備したりする。 ●遊びの場の近くにつくる場を設ける。 ●遊びの場づくりに必要なものを自分達で出したり動かしたりできるように支える。 **遊びに必要な役割を考え、それぞれに役割をもって遊ぶ** ●遊びの中の役割が明確になるように場を分けてつくる。 ●相談にのりながらつくるものや役割を明確にし、イメージを共有して進められるように支える。 **共通のイメージや目的をもって、友達と一緒に遊びを進めようとする** ●友達の思いや考えの良さを認める。 ●思いを伝えられるように促したり、伝え合う姿を見守ったり認めたりして、お互いの思いをつなげていく。 **前日の遊びを発展させながら遊びの続きを楽しむ** ●遊びの場を固定して出しておく。 ●集まりの場で遊びを紹介し、遊びの様子を友達と共有できるようにする。

表６　正月遊び（コマ･竹馬・すごろく）における環境構成と保育者の援助のポイント

□□□…子どもの姿　○…材料や用具に関して　●…場に関して　●…保育者の援助

３歳児	４歳児	５歳児
興味をもったときに遊ぼうとする ○遊具に触れる機会が増えるように、個人用のものを準備する。 ●目につくところに、自分の遊具が分かりやすいように準備する。	**自分(たち)で選んで、繰り返し楽しむ** ○遊びたいときにすぐ遊び始めたり遊びに加わったりできるように、個人用のものを準備する。 ○●自分(たち)で選べるように数種類の遊具を置き、近くに遊ぶ場をつくる。 ○●それぞれのタイミングで遊びに出たり入ったりできるように、遊ぶ場の近くに遊具を置く。	**繰り返し挑戦しようとする** ○●自分で選んだり、自分のペースで取り組んだりできるように、段階をおってできる遊具や場を準備する。
いろいろな遊び方を知り、おもしろさを感じる ●保育者がいろいろな遊び方を見せたり、友達の遊ぶ様子を伝えたりする。 ●集まりの場などを通して、子どもたちに遊び方を見せたり、伝えたりする。		**粘り強く取り組む** ○●繰り返し挑戦することで、段階的に達成感を味わえるような遊具や場を準備する。 ●学年全体やクラスで遊びの紹介をして、友達の取り組みを見合う機会をつくる。 ●遊びの紹介のときに、お互いの頑張りや達成感を共有できるように、友達同士で相談して進められるように見守る。 ●個々の子どものペースに合わせて教えたり一緒に取り組んだりして支える。
自分の思いや考えをもってやってみようとする ●遊びのイメージが実現できるように、保育者が必要に応じて提案したり、一緒に考えたりする。	**必要な用具や素材を使い、考えたことを自分たちで形にしようとする** ○今まで使ったことのある素材や自分で扱える用具を準備する。 ●必要な用具や素材を選んで遊べるように、保育者から提案したり、子どもたちと一緒に考えたりする。	
保育者や友達の姿を見て、やってみようとする ●保育者や友達の遊んでいる姿が見えるように場をつくる。 ●遊びに加わった子どもが楽しめるように、個別に丁寧にかかわる。 ●集まりの場などを通して、友達のしている遊びを全体に伝えていく。	**３～５人で集まり、友達の様子を見合いながら、自分もやってみたいと思ったり、遊びを楽しんだりする** ○遊び方を共通理解して３～５人で遊べるような数や種類、大きさを考えて遊具を準備する。 ●３～５人で集まって遊べるような広さの場を準備する。	**学年の友達の姿に刺激を受けながら、目標をもって取り組む** ●学年全体やクラスで遊びの紹介をして、友達の頑張りを見合う機会をつくる。 ●友達とできるようになった喜びを共有できるように、クラスで遊びを紹介する場をつくる。 ●遊びの紹介のときに、お互いの頑張りや達成感を共有できるように、友達同士で相談して進められるように見守る。
	遊び方を共有し、友達と一緒遊ぶことを楽しむ ●子ども同士で試行錯誤しながら遊ぶことを楽しめるように、子どもたちの思いつきや気づきに共感したり、言葉で伝えたりする。 ●相手に伝えようとする子どもの言葉を補ったり、一緒に遊び方を確認したりする。 ●遊びを楽しむ姿を見守ったり、楽しいと感じていることに共感したりする。	**友達同士で認め合いながら、一緒に取り組むことを楽しむ** ●友達同士で取り組もうとする姿を認めたり見守ったりする。 ●保育者が言葉を補って子ども同士で教え合えるように支える。

２－３　カリキュラムの見直し

事例検討及び作成した一覧表（遊びにおける環境構成と保育者の援助）をもとに、幼稚園のカリキュラム（指導計画）の環境構成や援助について再度見直した。

例えば、「泡遊び」から導き出された、３歳児にとっての遊びへの「入りやすさ」は、「興味がもてる」ことであり、そのためには、「身近にあること」「数量が確保されていること」「保育者がモデルとなっていること」などが必要である。これらをキーワードにして、カリキュラム（指導計画）を見直すことで、泡遊び以外の様々な遊びについても、その時期にふさわしい環境構成と援助をより具体的に考えることができた。

また、各年齢について事例を検討したりまとめたりしたことで、総合的に「対象と向き合う姿」についての捉え直しと検証をすることとなった。すなわち、幼小中一貫カリキュラムにおいては、学年区分ごとに「対象・他者・自己と向き合う姿」について表しているが、そこで表した「対象と向き合う姿」について、果たしてその表現は妥当であったかを再考することができた。

例えば、第Ⅰ期（３歳～５歳前半）の「対象と向き合う姿」は、「物事に興味・関心をもったり、心を動かしたり、見つけたり気付いたりする」「身近な事象への興味・関心をさらに高め、考えたり試したり工夫したりする。」と表していたが、このことについては、事例検討により、「興味・関心」「心を動かす」「考えたり試したりする」などの姿がすべて見られ、適切な表記であることが検証できた。一方で、事例の姿から読み取った「思いをもってかかわる」「イメージをもつ」などについては、文言としては表記されておらず、よりふさわしい表記となるようにさらなる検討が必要であると確認できた。（表７）

表７　対象と向き合う子ども姿（一覧表より抜粋）

	第Ⅰ期（３歳～５歳前半）	第Ⅱ期（５歳後半～小２）
「対象」と向き合う子どもの姿	物事に興味・関心をもったり、心を動かしたり、見つけたり気付いたりする。 身近な事象への興味・関心をさらに高め、考えたり試したり工夫したりする。	繰り返し関わり、関心を広げたり、気付きを深めたりする。

３．まとめ（成果と課題）

本研究の成果と課題としては、次のことが挙げられる。
①共通の対象（活動や遊び）を取り上げて、年齢ごとに「対象に向き合う姿」やそのための環境構成、保育者の援助を捉えたことにより、年齢や発達による特徴を押さえることができ、「見通し」をもつことができた。
②事例検討や作成した表から得た「見通し」は、保育者共有の財産であり、カリキュラム同様、若手・中堅等に関係なく、保育をする上で共通の見通しとなるものである。何をするか（遊び）だけでなく、どう用意するか、どうかかわるかを追求したことで、共有財産が増え、保育者のスキルアップにもつながった。
②事例検討で取り上げた対象（活動や遊び）は、どこの園でも取り組んでいる一般的な遊びであるため、他園にとっても参考としやすいものである。また、実際の子どもの姿から捉えた「対象と向き合う姿」であり、それに対応した環境構成のポイントと保育者の援助のポイントであるので、エビデンスに基づいており、普遍性がある。
④事例検討数は15事例で、カリキュラムに反映させる際の根拠となる材料としては、十分とは言えない部分もある。カリキュラムの内容により普遍性をもたせるには、それぞれの時期や遊びについて、さらに多くの事例検討を重ねることが必要である。

おわりに

本研究の目的は、幼稚園における３歳児から５歳児までの子どもたちの「対象と向き合う姿」について、年齢ごとに具体的な姿を捉え、その際の環境構成と保育者の援助について探ることと、そのことを通して本園カリキュラムを実践し、検証することであった。限られた事例検討を通してではあるが、丁寧に検討し、姿を捉えたり、環境構成や援助について考えたりすることで得た成果は大きかった。

今後は、「他者と向き合う姿」と「自己と向き合う姿」についても、同様に年齢ごとに丁寧に事例検討を繰り返していくことで、年齢や育ちに応じた環境構成や保育者の援助について考えていきたい。

「３つの向き合う姿」は、幼小中一貫カリキュラム編成の核となるものである。この３つの姿についての考察を続けていくことで、小学校や中学校へのつながりが見え、幼稚園の育ちをどのように小中へとつなげていけばよいのか、一人の人間を幼小中の12年でどのように育てていけばよいのかということの筋道が見えてくると考える。幼稚園のカリキュラム内容を吟味し充実させながら、12年間のカリキュラムがつながっていくように努めていきたい。

参考文献

文部科学省：「幼稚園教育要領解説」，フレーベル館，2018.
文部科学省：「指導計画の作成と保育の展開」，フレーベル館，2013.
文部科学省：「指導と評価に生かす記録」，チャイルド本社，2013.
文部科学省：「幼児理解に基づいた評価について」，2019.
秋田喜代美：「発達が見える！５歳児の指導計画と保育資料第２版」，学研プラス，2018.
横山洋子：「５歳児の指導計画」，ナツメ社，2018.
宮里暁美：「子どもの『やりたい！』が発揮される保育環境―主体的・対話的で深い学びへと誘う」，学研プラス，2018.
国立大学法人お茶の水女子大学：「幼児期の非認知的な能力の発達を捉える研究―感性・表現の観点から―」，2016.
松岡勝彦他：「幼小中一貫カリキュラムにつながる幼稚園カリキュラムの研究」，山口大学教育学部教育実践センター，学部・附属教育研究実践研究，2019.
岩立京子・河邉貴子他：「遊びの中で試行錯誤する子どもと保育者―子どもの『考える力』を育む保育実践」，明石書店，2019.
杉浦英樹・上越教育大学附属幼稚園他：「遊び込む子どもを支える幼稚園カリキュラム―未来の幼児教育・保育のために」，学文社，2019.